

シヤンティ

shanti

2009
冬
1月号

特集 アフガニスタン 復興への祈り

手を、とりあうこと。

私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。



社団法人 シヤンティ国際ボランティア会

プロジェクトの風景

a Scene of Our Project



上●古い校舎は壁がなく、熱い日差しが差し込んでいました。教室の広さや机も十分にありませんでした
 中●「私、この絵が好き」、「私はこっちの方がいいな」と壁に掲げられた絵を指さす女の子
 下●図書室には、SVAが出版した民話絵本や「絵本を届ける運動」などで贈られた絵本が並んでいます

●校庭に咲いたひまわり

カンボジア 〈学校建設〉

School
Construction
in
Cambodia

世界遺産アンコールワットのあるシェムリアップ州都から、車で1時間半の場所にあるトロピヤン・クロサーン小学校。2008年10月、5つの教室と図書室が併設された新しい校舎が完成しました。これまでは、ヤシの葉をふいた屋根とそれを支える柱だけの質素な建物で勉強していた子どもたちが、新しい校舎に目を輝かせて登校しています。新しい教室の席に得意げに座り、図書室で夢中になつて絵本を読む、227人の子どもたちの「勉強したい」という意欲が伝わってきます。この校舎は、日本テレビの「行列のできる法律相談所」100枚の絵でつなく学校建設プロジェクト」の企画で建てられました。その100枚の絵はタイトルに焼き付けられ、図書室の壁を飾っています。2008年、SVAを通してカンボジアに18の新しい校舎が贈られる予定です。日本の多くの方の想いが「学校」という形になって届いた時、子どもたちにひまわりのような笑顔がひろがりました。

(カンボジア事務所 鈴木晶子)



SVAの使命

私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ（平和）な社会の実現をはかります。

Cover
Photo

表紙：アフガニスタン、パーミヤン遺跡とブルカの女性
 [撮影：川畑嘉文]

巻頭言

道

みち

共に生き、共に学ぶ
 そして、喜びと悲しみ

会長 若林恭英

新たな年を迎え、皆さまにはご清祥のことと拝察申し上げます。

シャンティ国際ボランティア会は、設立30周年を2年後にひかえ、大きな節目を迎えようとしています。そんな折、2008年は第7回井植記念「アジア太平洋文化賞」を受賞するという栄誉に浴しました。



伊藤さんのご冥福をお祈りするとともに、当会においても安全管理に一層配慮していかなければならないと深く心に刻んでいます。

10月、大阪国際会議場で開催された授賞式に、茅野俊幸専務理事とともに出席してまいりました。その受賞理由は、「1981年からアジアで図書館活動を中心とした教育支援活動を通じ、その活動を通じて草の根レベルの交流とネットワークを培い、お互いが学びあう機会を作ってきた」ことに高い評価をいただいたからです。振り返ってみますと、当会の設立当初、まだ民間人による国際協力は一般的ではありませんでした。カンボジア難民キャンプ

の惨状を見て、「困難な状況におかれている人びとを見逃さずことができな」というその一念から、まだ誰も歩いたことがない、先の見えない道を、一歩一歩進んでまいりました。「共に生き、共に学ぶ」という願いのもとに、多くの方が活動に関わり、支援をくださり、現地を訪問されました。それが今日の活動の基盤であり、この度の受賞の理由でもあったのです。それ故に、ご支援をくださった皆さまと、これまでの歩みが評価された喜びを分かち合いたいと思います。

一方で、8月にはアフガニスタンで活動中だったベシヤワール会職員、伊藤和也さんが拉致・殺害されるという不幸がありました。同じ志を持ち国際協力の道を歩むものとして、活動の困難さを痛感させられました。改めて

近年の世界的な経済不況の波によって、子どもたちはより困難な状況に追い込まれています。活動のなかで直面するそうした現実を、各地に職員が赴いて報告する機会や現地の人びととの交流を通してお伝えしたい。それがアジアの人びとと共に生き、共に学ぶ道であると信じ、これからも歩んでいきたいと思えます。

FROM THAILAND

わたしの好きな絵本

my favorite book



チュアバーン・スラム図書館で、ミウちゃん（前列中央）とジムスタッフ（左端）

わたしはミウ。4歳。保育園に通ってます。家族は、お母さんとおばあちゃん、おじいちゃん。お母さんはおかず屋さんをしていて、朝、市場に行って袋をいっぱい提げて帰ってくるの。わたしも一緒に行ってお手伝いするのよ。

図書館は大好き。絵本がたくさんあるし、いろいろな活動も楽しいよ。お母さんはいつも借りてきた絵本を読んでくれるの。

好きな絵本は『おかあさんのお菓子』。クマのお母さんと子どもの話なの。クマちゃんがかわいいし、クマちゃんのお母さんが作るクッキーはすごくおいしそう。わたしはクッキーを食べたことないけど、どんな味かな、おいしいんだろうな、って思いながら読むの。まだ字は読めないけど、何度も聞いているうちにお話を全部覚えちゃった。ほかの図書館と合同の絵本を読む大会があったとき、この本を読んで一等賞をとったの。お母さんがよるこんでくれて、うれしかった。

大きくなったらお医者さんか、シンデレラみたいに踊るダンサーになりたい。

(インタビュー SVAタイランド ジム)

女性が働くこと

上：豪雨で川が氾濫し橋が決壊したため、
村人の助けで反対岸に渡る
中：学校を建てたドラク村の村長と談話
下：山本スタッフを通して、
アフガン人女性の生の声を聞くことができた



「笑いです、」シャルワカミーズがめくれています。「男性に近寄りすぎです」。スタッフからの指摘が飛び交う。地方の田舎に行くたびに、帰りの車の中は延々と私の反省会になる。女性が会話の中で笑顔を振りまくのは、男性を誘っているとしてふしだらだと思われたり、間違えられたりするところがあるらしい。男性と話をしている距離にも気をつけなければならぬ。一人分以上間隔をあけて座るのがたしなみのある女性とされる。それでも実際私に求められる規律は、アフガン女性が日常守っている規律の半分程度と思われる。反対に地味に地味にと、化粧もしないで仕事をしていると、「少しは、気を使ったほうがいいのではないですか？綺麗に見られた方が得することも多い

ですよ」と言われたりして、一体どっちなんだと呆れてしまう。そんなに気をつける必要があるのか、と最初は思ったが、実際の活動にも大きな影響をおよぼす。「ふしだらな外国人の女性の働く団体にはとても協力できない」という「立派な」理由として成立する上に、下手をすると襲撃など命に関わる問題へと発展することも現実にあるのだ。

ある時、これから地方の活動地にかけてという時にスタッフががなやらもめていた。何が起きているのかと思ったら、原因は車の台数だった。今日の訪問は私を含めて4人が行くことになっている。5人乗りの車だから、前に1人と後ろに3人でよいかと思っていたら、私が女性なので、体を寄せ合って乗るのは好ましく

ないという。そのため2台で行くことにしたのだが、2台目の車の手配できずもめていたのだった。「私はそんなの気にしないから、大丈夫」と声をかけると、私のための気遣いではなく、問題は村人が変な誤解をすると困るということだったのだ。

女性がアフガンで働くことは、外国人であるというだけで既に壁に加えて、更なる困難があることは確かである。それでも、女性の視点が必要なのは、女性の領域に足を踏み入れることができるのは女性でないと難しいからだ。

よく民家に招待されると、まず客室に案内される。離れになっている時もあるが、大抵は入り口のすぐ隣という設計が多い。男性客はその部屋を出てうろうろするのはマナー違反とされ、大抵

復興への願い

戦争前、自然豊かな美しい国だったアフガン。
現在は多くの都市、村が爆撃によって破壊されている
(撮影：川畑嘉文)



戦争前、自然豊かな美しい国だったアフガン。
現在は多くの都市、村が爆撃によって破壊されている
(撮影：川畑嘉文)

私たちの美しい国
私たちの愛する国
この川も、この地も、
春も、山も、全てが愛しい
この国は私たちの悲しみを癒し、心を解放してくれる
私たちの体の一部
アフガニスタン
(「私たちの美しい国」より)

2008年7月、タリバンが、東北部のニューリスタンを制圧したというニュースが飛び込んできた。治安の悪化は顕著になっていく。パキスタンの国境沿いでは、NGO関係者らの名簿が流出したといううわさが流れ、パキスタンに家族を残すスタッフは、毎週恐怖の中を帰路につく。

ままならない復興、見えない平和の糸口にたまらなくなったスタッフ、私の部屋にやってきた。涙が止まらないのだ。私もつられて泣いた。泣いてもどうしようもないという。そのため2台で行くことにしたのだが、2台目の車の手配できずもめていたのだった。「私はそんなの気にしないから、大丈夫」と声をかけると、私のための気遣いではなく、問題は村人が変な誤解をすると困るということだったのだ。

女性がアフガンで働くことは、外国人であるというだけで既に壁に加えて、更なる困難があることは確かである。それでも、女性の視点が必要なのは、女性の領域に足を踏み入れることができるのは女性でないと難しいからだ。

よく民家に招待されると、まず客室に案内される。離れになっている時もあるが、大抵は入り口のすぐ隣という設計が多い。男性客はその部屋を出てうろうろするのはマナー違反とされ、大抵

は一旦客室に入ると食事が終わるまでは、その部屋を出ることはできない。

ある日、バンバコット村の村長宅に招かれた。赤のアフガンカーベットが敷かれ、立派な客室にスタッフは皆、ため息を洩らした。女性である私は、一息つくこと、家主が奥へと連れて行ってくれる。ときどきしながら客室を出て奥に行くこと、半分壁が壊れた平屋の中庭で女性たちが薪を組んで料理をし、その周りを裸足の子どもたちが走り回っているという光景があった。

アフガンの人びとは暮らしが大変でも、客人を歓待する。時には、立派な客室とは裏腹に壁は崩れ、家具なども一切ない家もある。女性たちは、客が訪れるたびに大量の食事を用意する。大抵は、カプリバラオ(ご飯に煮込んだ肉を埋め込み、オレンジの皮や干し葡萄をのせたもの)、肉類、生野菜、炒め野菜に、最後はフイレニという白いゼリー状のデザートである。これらを女性たちは限られた設備で作る。

食事は、まず男性客、その残り物を女性と子どもたちが食べるのである。男性客も出された料理があまり空にならないよう気を使ったりしながら食べる。

民家の奥まで入ることで初めて、その村々の生活レベルが伺われる。表から見えるよりもずっと貧しい状況があったりする。そういう状況を知るために、たとえ困難があったとしても、女性が復興支援活動に関わることは重要なのだと実感した。

だある気がする。戦争のない平和な社会を目指すのは、万人に共通の願いであり、強制的に平和を作ることはできない。私たちは、時間がかかっても平和が確実に根付く社会作りへの援助をしていくことが重要なことなのだと思う。

そしていつか、平和なアフガンの地に多くの人が訪れ、客人をあたたかく迎える人びととの交流が実現する日が来るように、そう願っている。

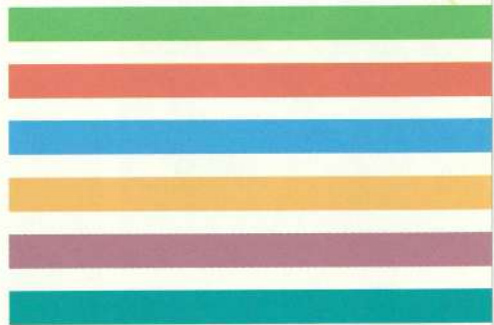
事務所の開設から今日まで、治安悪化という厳しい状況に直面しながらも活動を継続して来られたのは、あたたかく見守ってくださった多くのご支援者のおかげです。日本から支えてくださる皆さまの想いは、現地スタッフの心の支えとなっています。この場をおかりして感謝申し上げます。今後とも、宜しくお願ひ申し上げます。



上：子ども図書館での絵本の読み聞かせ
(撮影：安井浩美)
下：1冊の絵本を一緒に読む男の子たち

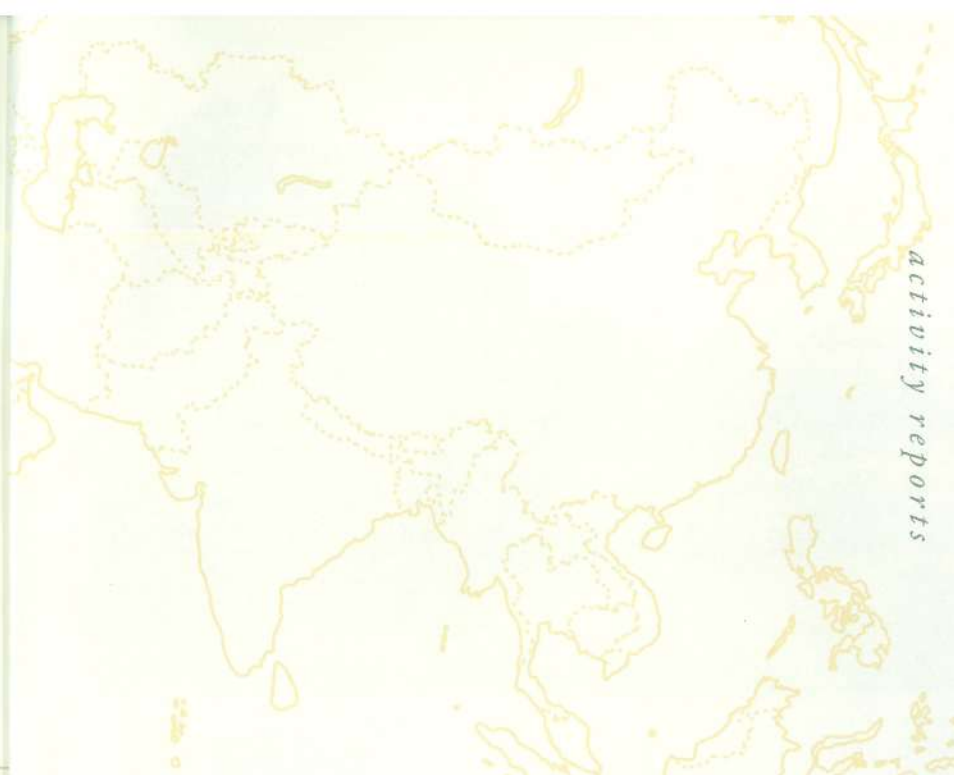


山本英里 (やまと・えり)
1974年、静岡県生まれ。英ブリストル大学大学院修士課程修了。2001年SVAタイ事務所勤務。2002年ユニセフのアフガニスタン事務所に出向。2003年からSVAアフガニスタン事務所の現地調整員を務め、2007年5月から東京事務所海外事業課。2008年6月からアフガニスタン事務所長代行を務め。



SVA 活動報告

activity reports



ラオス Laos 移動図書館と ラオス女性同盟



集まった20人の村の女性たちに話をする女性同盟員

ラオス南端にあるチャンパサック県。県都パクセにある県公共図書館をSVAは3年前から支援しています。年々利用者が増えてきているものの、公共交通機関のないラオスで図書館に來られる人はごく限られています。

そこで図書館員は近郊にある村の子どもや村人を対象に、移動図書館活動を始めました。袋に本を詰めてオートバイに乗せ、村や小学校にかけて行きます。

8月29日、100冊の本を持って訪問したのは7km離れたウドムスック村。この村で本を見る機会はほとんどなく、児童約100人の村の小学校には教科書以外の本は1冊もありません。初めて訪れたこの日、ほとんどの子どもたちが生ま

れて初めて絵本を目にししました。図書館員はその一人一人に本の読み方、扱い方から教えていきます。

チャンパサック図書館が行う移動図書館活動には、他にない大きな特色があります。それは、ラオス女性同盟の協力を得て、村の女性を対象とした啓発活動も同時に実施していることです。今回は女性の役割、出稼ぎ労働、児童労働についての本の紹介と話し合いをしました。

でも、図書館員の悩みは、本を運ぶオートバイの燃料費が高く、なかなか頻りに村を訪ねられないこと。SVAでは、今後の予算がとれるよう、情報文化局と話し合いを続けています。

(高橋久夫)

タイ Thailand 手作りアクセサリーで 本を購入



「色とりどりのビーズを選ぶのが楽しいの」

タイの学校は2学期制。前期が終了した10月には1カ月の休みがあります。この休みにタイ人の奨学金担当スタッフと協力して、図書館に通っている地域の子どもたちと週1回のビーズアクセサリー作りを始めた。

北タイで活動しているアーサー・パター・アック財団では、日本人スタッフの出羽明子さんが、ストリートチルドレンの子どもたちにアクセサリー作りを指導しており、専用の店舗を持つほど人気があります。その出羽さんに指導をお願いして作り方のコツを教わりました。

留め具と長さの確認は大人の助けが必要ですが、あとは子どもたちが好きなビーズを選んでプレスレットやピア

スを作ります。初めての時は考えに考えてようやく1つ、2つ作った子どもたちですが、回を重ねるごとに、どんどん凝ったデザインや色合いのものを作れるようになってきました。常連の子どもも増え、ほぼ週1回のこの活動が定着しつつあります。

子どもたちが作ったビーズアクセサリーは事務所内のクラフトショップで販売しており、売り上げは図書館の本の購入費用になります。5つ作ったら6つめはご褒美に帰っていいことにしているの、最後の1つはお母さんに、おばあちゃんに、と言いつつ嬉しそうに作っています。

(江幡むつみ)

ミャンマー(ビルマ) 難民 Myanmar (Burma) Refugees 青少年ボランティアが 人形劇公演



青少年ボランティアが1カ月前から練習した人形劇

10月13日、ウンピナム難民キャンプにて青少年ボランティアによる人形劇公演が行われました。集まった200人の子どもたちは、「3匹のこぶた」の人形劇や歌遊び、ゲーム、絵本の読み聞かせを楽しみました。

年2回実施している青少年ボランティアの公演ですが、第三国定住政策によって大きな影響を受けています。海外に移住するため難民キャンプを離れるメンバーが増え、代わって新たに加入したメンバーにその都度研修をしなくてはなりません。今回の公演も、最近加入したばかりの青少年が中心となって行いました。

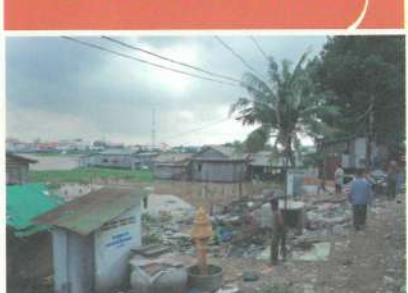
設立した2006年から活動しているセネボーさん

700を超えるブノンペン・スラムの中から、SVAは最も状況の厳しい20カ所を選び、子どもたちのための移動図書館活動を行っています。しかし、現在そのうちの4カ所が移転の危機に直面しています。

2007年2月、ブノンペンはカンボジアの投資会社と、これら4つのスラムの土地を含む133ヘクタールを7900万ドル(約79億円)で99年間のリース契約を交わしました。このニュースは新聞でも報道され、そこに住む4250世帯の住民を不安のどん底に落とし入れました。スラムに住む人びとにとって一番不安なことは、開発の名の下に生活の基盤を根こそぎ奪われ、ほかの場所に移転

(手束耕治)

カンボジア Cambodia ブノンペン最大の スラムに移転の危機



湖の周辺にできたスラム。大型ショッピングセンターを作るため、埋め立てが進められている

しなければならぬことです。移転補償などがまだ未整備なカンボジアでは、十分な補償がないまま、時には強制移転が執行され、人びとは職を失い、子どもたちは就学の機会を奪われます。現在、居住権や土地問題に関わる多くのNGOが地域住民と協働してブノンペン市裁判所へ提訴する準備を進めています。

この開発事業は数年にわたって行われる見通しで、住民の不安な日々が続きます。スラムの子どもたちを励ますためにもSVAは移動図書館活動を通して子どもたちの教育サービスを継続していきます。

アフガニスタン Afghanistan 「自分の服を縫いました」 図書館で裁縫教室



ミシンを使って服を縫う子どもたち。男の子も参加しています

子ども図書館では、2008年1月から裁縫教室とハンディクラフト教室を開いています。現在、週に3回ずつ、40人程の子どもが参加しています。

裁縫教室では、ミシンを使って自分や家族の着る服を縫います。シャルワカミーズというアフガニスタンの衣装は、膝丈のブラウスとズボンがセットになっていて、ズボンは大きめに作り、ひもやゴムで長さと腰回りを調節して着ます。ザルミナちゃん(12歳)は、「服を縫ったり、縫うことができるようになって両親も喜んでいきます。最近はお姉も図書館に来るようになりました」と話してくれました。

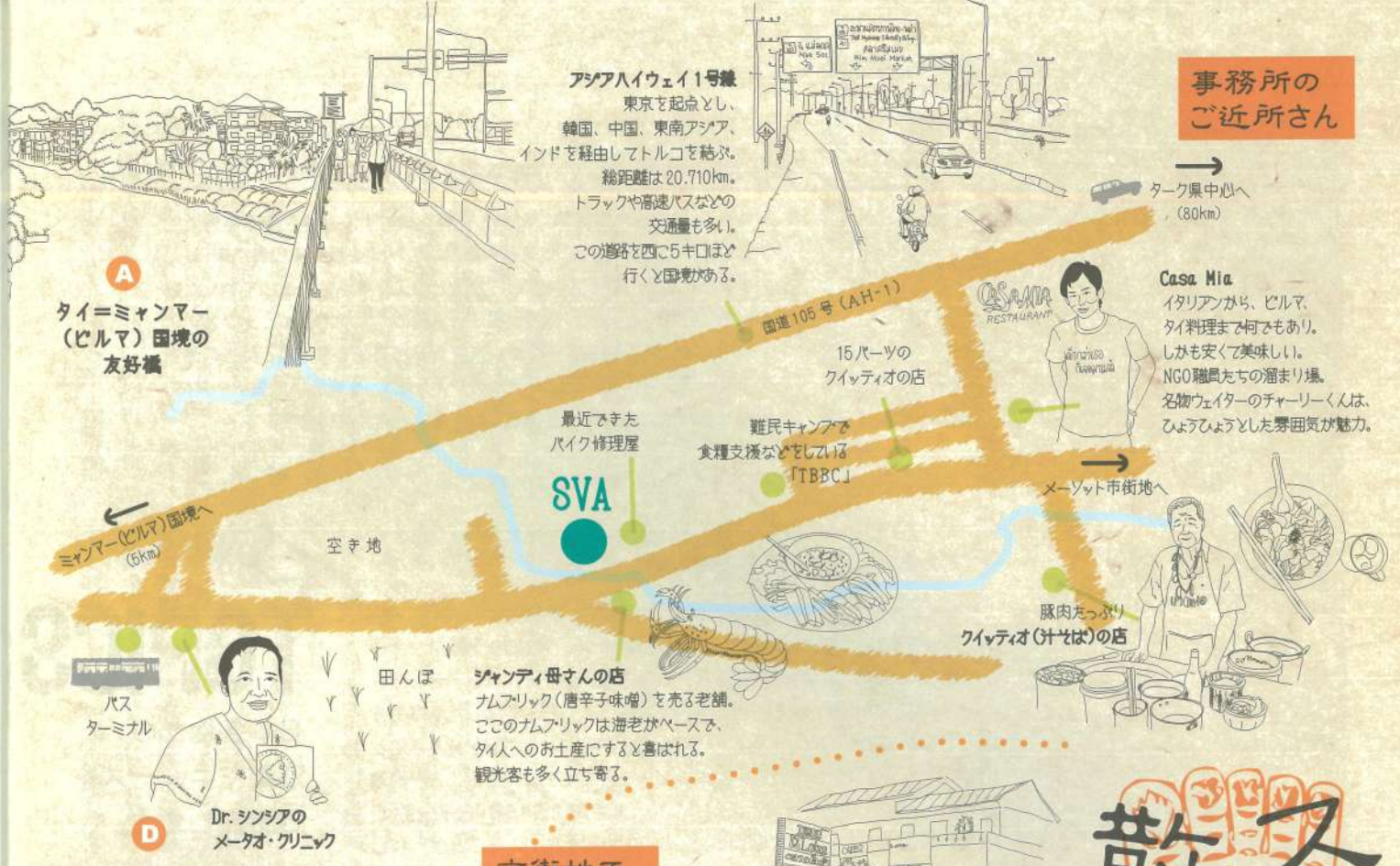
10月初め、イードという断食明けを祝う行事では、大人

はもちろん、子どもも着飾ります。貧しくて新しい服を買えない子どもも、自分で縫ったシャルワカミーズを着て、晴れやかな面持ちで祭りに参加することができました。

ハンディクラフト教室では、ビーズを使ったネックレスやイヤリングなどのアクセサリー作りも人気があります。子どもたちはそれを身につけたり、プレゼントにしています。

(ワヒド・ザマニ)

事務所の
ご近所さん



ターク県中心へ
(80km)

Casa Mia
イタリアンから、ビルマ、タイ料理まで何でもあり。しかも安く美味しい。NGO職員たちの溜まり場。名物ウェーターのチャーリーくんは、ひょうひょうとした雰囲気の魅力。



散歩の道



テスコ・ロータス
街の中心にある最大手スーパー。店内にはビルマ語表記も多い。10月から妻が研究活動で日本に滞在。平日は外食が多いが、週末は自炊している。

国境の町メーソットのビルマ人

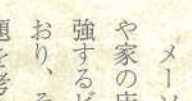
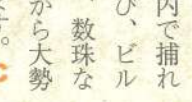
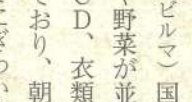
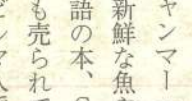
文・写真 小野豪大

市街地で
よく行くお店



床屋
タイの床屋はパカカンに頼る人が多いが、横浜で4年間ヘアカットの仕事をしてきたジョアンは、カットの腕が抜群。

市街地でよく行くお店



ミャンマー(ビルマ) 難民事業の拠点。タイ北西部のメーソットです。私たちの事務所から西に5km行ったところにあるのが、タイ・ミャンマー(ビルマ)国境の町メーソットのビルマ人

「リトル・ヤンゴン」と呼ばれるメーソットの市場に行くと、ミャンマー(ビルマ)国内で捕れた新鮮な魚や野菜が並び、ビルマ語の本、CD、衣類、数珠なども売られており、朝から大勢のビルマ人でにぎわいます。

ビルマ人の中には経済的に豊かなタイで働くために非合法に入国している人も多く、その人びとのほとんどが不法就労を余儀なくされています。ビルマ人

小野豪大 (おの・たけひろ)
1963年、北海道生まれ。1993年、SVAに入職。ラオス事務所を経て、2002年東京事務所勤務。2007年4月からミャンマー(ビルマ)難民事業事務所へ。スタッフから「オノサン」と呼ばれている。

Shanti
な人たち

No.44
広瀬遼
Ryo Hirose



生涯チャレンジし続けたい

4年前、大学に入学した時に渡された一枚のチラシ。いきいきとした目をしたカンボジアの子どもの写真があった。「この子どもたちに会いたい」と思った。それが広瀬遼さんとカンボジアとの最初の出会いだった。

学生が主体となって運営するNGO「風の会」に入り、カンボジアを訪問し、子どもたちと交流した。現地で、子どもたちの自立支援の活動をしている「アジア子供教育基金」代表の堀本崇さんと出会い、考え方や生き方に大きな影響を受けた。

「カンボジアの復興に携わるために、人びとの心の拠り所である仏教を知りたい」とカンボジアで僧侶になった堀本さん。純粋な想いを行動に移せる彼に憧れ、その姿に一步でも近づきたいと思った。ところが、2006年11月、その堀本

さんがカンボジア国内で交通事故に遭い亡くなった。当時大学3年生だった広瀬さんは、尊敬する堀本さんへの追悼の意を込め、カンボジアに学校を建てることを決心した。生半可な気持ちではできないと大学を休学し、資金集めを開始した。

初めのうちは何十社という企業にあ

た。だが、その度に断られ、苦しい日々が続いた。しかし、家族や知人に頼ることには抵抗があり、仕方なく借金をする覚悟をした。そんな時、友人から「もつと周りにいる人間を信じていいんじゃないか」と言われ、はっとした。自分がやるうとしていくことに賛同してくれる人たちがすぐ近くにいた。「自分が動き始めると周りも動く。人との信頼関係って大事ですね」と広瀬さんは語る。堀本さんの知人や自分の友人、活動に共感してくれた47人が寄付をしてくれた。

学校建設は、建設後のフォローアップも大切にしているSVAを選んだ。そして自らも基礎工事を手伝うために1カ月半カンボジアに渡った。2008年夏、たくさんの人の想いのこもった小学校が完成。「いろんな人に助けられたことがこの活動を通じて一番嬉しかった」と振り返る。今春、広瀬さんは大学を卒業し、テレビ局に就職する。「社会に貢献できることをしたい」「生涯成長し続けたい」という2つの信念を持ち、新たな世界に飛び込もうとしている。「不安もあるけれど、目標のためには諦めずにチャレンジし続けたい」と真剣な眼差しで語ってくれた広瀬さん。その目は、未来を見つめるカンボジアの子どもたちの瞳と重なって見えた。

(海外事業課 山室仁子)

本の紹介



「ラオスの山からやってきたモンの民話」
発行・訳・解説 安井清子
定価 1050円

ラオスの山に住むモン族は、もともと文字を持っていませんが、昔から伝わる民話を世代から世代へと口承で語り継いできました。1997年から数年間、私はラオス文化研究所の協力を得て、山の村々を回り、お年寄りたちが語る民話を数百話録音しました。この本ではその中から11話を解説とともに紹介しています。日本人の感覚からすると受け入れにくい話もありますが、モンの生活や文化を紹介することで、お話が生まれた背景やモンの世界観を伝えようと試みています。山の自然に支えられた自給自足の質素な暮らしが、実はいかに豊かな言葉によって彩られているのか。山道を歩きながら人びとが歌い奏でる言葉、生命の誕生、そして死に際して語られる言葉、目に見えない精霊たちに向かって語られる言葉。モンの村にいと、語りだされる言葉に「言葉」がぎゅとあるに違いないと感じます。モンの語りの世界、目には見えないけれど豊かな世界を少しでも伝えることができれば幸いです。

安井清子 (元SVAスタッフ・代議員)
この本は、一般の書店では取り扱っていません。購入はSVAまで。

募金の税金控除について

シャンティ国際ボランティア会は、特定公益増進法人の認定を受けています。ご寄付は税金控除の対象になります。お手元にある当会発行の領収証を添付して、確定申告を行ってください。

ご遺産、相続財産の寄付についても非課税となります。法律上の手続きがございますので、詳しくは専門家、または当会にお問合せください。

担当◎経理・総務課 市川斉

今年もご支援ありがとうございました

2008年も多くの方からの募金と励ましをいただきました。アジアの子どもの未来がより良いものになるように、来年も精一杯努めていきたいと思ひます。

皆さまとアジアの子どもたちに、佳き新年が訪れることを願っています。

12月27日～1月4日まで東京事務所は冬休みをいただきます。

**リサイクル・ブック・エイド
にご協力を!**



読み終わった本や不要になったCDやDVD、ゲームソフトを寄付して、アジアの子どもの教育を支援する「リサイクル・ブック・エイド」。2008年10月から申込み方法が変更になりました。ダンボール1箱分(本またはCDで30点程)以上を梱包いただき、電話かFAX、またはホームページからSVAにご連絡ください。箱数と集荷希望日(お申込みから10～20日後)をお伺いします。送料は無料です。

(少量の場合はSVAに直接お送りください。その場合は送料のご負担をお願いします。)

担当◎国内事業課

2009年度通常総会のお知らせ

2009年度通常総会を下記の通り開催いたします。社員会員の皆さまには3月初旬にご案内と総会資料をお送りします。総会での議決権は社員会員の方のみになりますが、賛助会員の皆さまにもご出席いただき、傍聴、発言していただくことができます。(総会についての詳しいご案内を同封しています。ご覧ください。)

日時 2009年3月27日(金)
通常総会 13:30～17:30
懇親会 18:00～19:30

会場 同封のチラシに記載しています。
主な議題 2008年度事業報告・決算報告について
2009年度事業計画・予算案について
役員・代議員改選

担当◎経理・総務課 市川斉・河口尚子

訃報



2008年11月20日、東京事務所の経理・総務課の澤田隆史スタッフが、肺炎のため亡くなりました。48歳でした。

青森県出身の澤田スタッフは、1984年東北福祉大学を卒業すると同時に上京し、SVAの職員になり、まだ組織として整っていない草創期から活動を支援しました。身体に障がいがありながらもそれを感じさせないほどの活躍ぶり、海外の活動現場に立つことはありませんでしたが、パソコンやデータ管理の知識にも優れた大変頼りになる人でした。SVAのことでわからないことは、なんでも聞いていました。まさに縁の下の力持ちであり、私たちの知恵袋でもありました。

近年は、会員業務や募金の領収証発送などの支援者対応を務めていました。お礼状に一言手書きのメッセージを添えるため、コツコツと残業する姿もよく見られました。

SVAの活動に貢献してきた澤田隆史氏のご冥福をお祈りいたします。

スタッフのひとこと 「冬といえは...」

■子どもの頃、冬はもっと寒かったような気がします。30～40年前の横浜のことですが…。都心では、3センチもあるような霜柱や、水溜りに厚く張った氷を見かけることもなくなりました。やはり、温暖化が進んでいるんですね。(経理担当 黒澤真理子)

■「ぐりとぐらのおさやくさま」。赤と言のマンントのぐりとぐらが、雪の中を歩く姿に憧れて、姉とバスタオルをかぶって真似たことを思い出します。子どもたちが大きくなったときに、気持ちがあほこりするような思い出がたたくさんありますよ。(広報担当 佐藤麻沙)

■1月17日は「阪神淡路大震災」の日。家の焼けたい臭い漂った被災地が記憶に甦ります。多くの方が亡くなったあの日から14年を経て、どれだけの人が「我がこと」と感じているでしょうか。年に一度、あの震災を振り返り、命の大切さを顧みたいと思います。(緊急救援担当 白鳥孝太)

■編集後記 亡くなった澤田隆史スタッフは、一本筋の通った、目立つことを嫌う人でした。確かに存在したという生きた証を鮮烈にのこして、逝ってしまった澤田さん。また悲しみていっばいですが、澤田さんの想いをスタッフみんなが受け継いでいきたいと思ひます。次号から編集担当が替わります。今まで読んでくださったありがとうございます。(村田恵)

社団法人
シャンティ国際ボランティア会

〒160-0015
東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階

TEL 03-5360-1233
FAX 03-5360-1220

WEB <http://www.sva.or.jp>
E-Mail info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724

● 当会へのご寄付は、所得税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

「シャンティ」は、FSC 森林認証紙 (SGS-COC-1773) にノンVOCインキ (石油系溶剤 0%) で印刷しています。